

桜の季節が終ると、若葉の緑が目には著き始める。樹木の少なくなった都会でも、四月の末から五月にかけては、あちこちから萌え出す思いがけない緑に、こんな所に、こんな木が生えていたのかと、驚かされることも少なくない。

緑の目立つこの季節に、「色彩」をめぐって、幾つかのエッセーを集めてみた。人と色とのかわりは、単なる光の波長の差異への反応ではない。それ以上に、それぞれの色に喚起されるイメージーション、或いは、色に託されてきた象徴的な意味などに、より多くを負うていると言えようである。

嬰兒は、「赤子」でこそあれ、緑色とは縁遠いものを、「みどりご」と呼び習わし、つややかな女の髪が、「みどりの黒髪」と賞めそやされてきたのは、その何よりの証である。

絵の具や化粧などで外容を覆うことを、「色を塗る」とか「色を作る」などと言うことがある。これは、人間にとつて、色が、常に、ものの外面と密着して現われることを物語つてもいる。目に見えるものであり、明かるい光の下でさえあれば、直ちに識別可能であるという色の性格が、優れて「外面的」に位置づけられるのであろうか。

と同時に、色は、ものの内的状態の「徴」でもある。例えば、「疲労の色が濃い」「秋の色が深い」などと言うとき、この場合の「色」は、外に現われて人の目をとらえる「徴」ではあるが、表わされるものは、「疲労」「秋の気配」などと言う内面的なことがらなのである。

「色」や「形」は、目に見えるものであり、外側のものでもある。それでいて、内側のものとの関係なしには存在し得ないのが、人間世界の面白さであろう。(和)

幼児の教育 第八十巻 第五号

五月号 © 定価二七〇円

昭和五十六年 四月二十五日 印刷
昭和五十六年 五月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 編行人 津 守 真

111 東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一
印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします